

第3回新淡路地域ビジョン検討委員会 議事録

1 日 時 令和2年10月30日(金) 18:30~20:10

2 場 所 洲本総合庁舎3階会議室

3 出席者

委員：山本委員長、澤田副委員長、西原委員、栄井委員、片平委員、堤委員、森委員
東田委員、横山委員、安居委員、原委員、堀内委員

(12名)

県：亀井県民局長、吉野交流渦潮室長、刃物班長、福栄

4 内 容

(1) 県民局長挨拶

本日は第3回目の淡路新地域ビジョン検討委員会に出席いただきお礼申し上げます。

最近の大きなニュースとして、パソナが本社機能を淡路島に移すという報道等があった。約3年で1200人を移動させ、家族も含めると非常に大きな人の動きでありインパクトがある。県民局としても淡路島の活性化の起爆剤となるよう支援していきたいと考えている。

新型コロナ感染症については、まだ収束が見えない状況である。GOTOトラベルにより観光業は活気を取り戻しつつある。10月にはゴジラのアトラクションオープンや高速バスの温泉地までの延伸などの変化があった。今後も感染拡大防止と経済の両立をめざして努力して参りたい。

本日も活発な議論をお願いしたい。

(2) 事務局から資料説明(省略)

(3) 意見交換

[委員]

南あわじ市の出生率が県下1位となっているが要因はあるのか。

[委員]

合併以降、第2子以降の保育料無償化など独自の施策は実施している。そのため子供の全体数は減少を続けているものの第2子、第3子の減少幅が横ばいとなった。ただ、ここ数年は激減している。第1子が減っているために、第2子、第3子も減っている。

[委員]

5年前に淡路市の地域おこし協力隊で移住したが、それ以前にも淡路島に移住を希望していたときに、子育て政策が素晴らしい南あわじ市への移住を勧められた。広田辺りに住めば洲本市にも近いので、島内でも移住する人が増えたと聞いた。

[委員]

そういう情報はどこで入手するのか。

[委員]

世間話の中で聞くことが多い。

[委員]

施策について、大々的なPRはしていたのか。

[委員]

ある程度はPRしていたと思う。今ほどSNSでの発信などはなく、ホームページや広報である。新聞紙上でも賑わしたとは思いますが。

[委員]

南あわじ市で保育料が無料になったときに、子供の習い事にお金を使う親御さんが増えたが、淡路島には習い事の選択肢が少ないというのがあった。子供を産むときはいいが、そのあとの子育てに不安はある。

[委員]

習い事だけでなく学校のクラブ活動にしても選択肢が少なくなっているように思う。農業生産額や漁業生産額が減ってきているが、生産量自体は減っていないのではないか。

[事務局]

データを持ち合わせていない。

[委員]

根本的に人口が減って、高齢者が増えている中で、生産額が減少するのは当然である。農家1戸あたりの収入がどうなっているかという指標が重要ではないか。今までと同じかこれまで以上に稼げているのであればそれは暮しやすい地域ということだと思ふ。

[委員]

防災意識はこれまでよりも高まっている。これまでの防災士の活動は啓発が主であった。これからは具体的にどれくらいの備えが必要かということが目標として必要だと思う。災害が起こると相変わらず公助に頼りがちである。ある自治会ではマニュアルの中に「公助をあてにするな」と書いてある。それくらいの覚悟がないと南海トラフに対応できないと思う。自分達だけで何とかするという意識を高めないといけない。

子供の習い事が少ないということについて、逆に考えると新しいサービスや事業を立ち上げやすいと思う。

福祉活動をしているが、3市ごとにローカルルールがあってサービス内容が違う。3市が1つになる必要はないが市民サービスを1つにすることで住みやすい町になるのではないか。

[委員]

保育所の入所手続きも市によって全く違う。住んでいるところで市民サービスが変わるのはどうかと思う。淡路島が1つの行政区になれば住みやすさが変わってくると思う。

[委員]

私の住んでいる洲本市納地区は南あわじ市の広田地区に隣接している。洲本市民でありながら学区は広田で教育委員会も南あわじ市という変わったルールがある。行政が合併する必要はなく多様性があると思うが、市民に直面するサービスを1つにすることで住みやすくなる。人口減少が避けられない以上、移住しやすい環境づくりも大事ではないか。

[委員]

人口減少が進み行政体を担う人も少なくなったときにサービスを統一することも1つの解決策になるのではないかと思う。

[委員]

淡路島には学ぶ場が少ないと感じている。島内に地域資源の活用を学ぶ場がほしい。淡路島は地域資源のポテンシャルが高いという統計が出ているのでそれを生かす方法を教えてくれるところに子供達を進学させたいと思う。

[委員]

農業の面で学びの場の提供の可能性はあるか。

[委員]

個人で就農や移住したときのサポートとしてグループ組織を作った。それで成り立つ人が増えてきているし、雇用されて農業をやりたい人の受け皿にもなっている。

今年は事業承継にもチャレンジしている。ある果樹農家では、息子が後を継ぐにはまだ若い、数年後には継げるかもしれない。その間をつなぐ事業継承農業を協同出資で来月実施する。仮に息子さんが継承しなくても別の方が継承する形が出来る。学校型ではなく雇用の学びの場をイメージしてやっている。

[委員]

淡路の人は自分の土地のものに興味がない人が多い。外の地域を見ることで自分の地域資源の良さを認識して伝えていくことが大事だと思う。

[委員]

「福良CAP」というチャレンジモールがあるが、認知度が低く観光客に響かない。パソナのよう企業はCM活動をしているため客が集まってくるが、個人で頑張っているところに対してプロモーションや発信が弱い。淡路島のポテンシャルを生かすには観光業がものすごく大事だと思うが、これからの30年後を考えるともっと発信していくことが必要になると感じている。

島外から移住してきた若い人がさらに人を呼んでくるという流れが少しずつできているが、地域で発信していく媒体がもっと必要だと感じる。今、淡路島で広告しようとするとな新聞折り込みくらいで、あとはリシェのような雑誌で発信するしかPRの方法がない。そのあたりをどう行政が淡路島全体で応援していくのか気になっているところである。

[委員]

観光協会の活動はどうか。

[事務局]

3市が一体になって頑張っている。2年前から従来の観光業者の集まりだけでなく行政職員も参加してリシェの編集長をトップに据えて精力的にやっている。ただSNSの発信やホームページの作り方などで課題はある。

[委員]

観光から移住へのつながりがないということも気になっている。

[委員]

観光と農業、漁業もふわっとしか繋がっていない。観光にいい島というイメージが広がっている中で農業や水産品の価値を高めることにも繋がれば淡路島で豊かな暮らしが出来るということになり人が来ると思う。

[委員]

あるお肉屋さんの求人サイトをつくったときに生活の豊かさの表現を工夫したところ2週間で3

人募集があった。

[委員]

移住してもらうためには暮らせるということを証明しなければならない。地域の良さを示すときに観光と人の他に、すぐにお金にはならないが自然環境や歴史などの資源にも注目する必要がある。

[委員]

移住の成果でいうと、淡路島ワーキングホリデーという企画でゴールデンウィークにカフェや観光施設等のアルバイトとして東京や大阪から20名程度来てもらった。その方々が休みの日に農業体験などをすることで、今も1名結婚して東京から移住している。

[委員]

地域資源と仕事のつながり以外に淡路の文化的な資源は何かあるか。

[委員]

地元の一宮を説明するときにはよく線香を利用する。瓦産業と比べるとまだ頑張っていると思う。

[委員]

瓦が衰退した理由は工法を大学で教えていないことが1つ上げられると思う。そのため瓦を使った建て方を知らなくなりますます使わなくなる。瓦を使って快適に暮らすシステムをハウスメーカーと大学がコラボすればいいと思う。伝統工芸と現在のシステムをつなげていくことが大事である。

[委員]

南あわじ市では人形浄瑠璃を子供達に教えてくれている。子供達が伝統文化を日常会話の中で誰かに伝えていくことは大切なことであると思う。

[委員]

海外は香水など香りの文化があり線香の評判も良く、海外向けにも発展するのかなと感じている。淡路に来るまでだんじり唄の存在を知らなかった。かなり地域に根付いていると思うがどんどん衰退していつかなくなる気がする。

[委員]

地域のことがわかる淡路島移住マニュアルみたいな物があればいい。

[事務局]

高校生や小学生向けに歴史や文化などを冊子にした物を配付している。

[委員]

島外から嫁いできた人にもそういう物を配付してもらえれば助かる。文化を知って人とつながれる部分があると思う。

[委員]

線香は身近にあってつながってきているものであるが、新たな形に変えて海外にも発信しなければいけないと思っている。農業にしても今は昔とはやり方が変わってきている。子供が小さいうちに淡路のことを学ばないと淡路島に魅力を感じなくなり島に帰ってこなくなる。違う視点で淡路島を捉えている移住者と交わることで今まで当たり前だったことが魅力的だということを知るきっかけにもなる。

[委員]

ビジョンがめざす頃には我々が高齢者になっているが、今の高齢の方とのつながりをどうもてばいいか。

[委員]

今の高齢者自身は後の世代の意識はないと思うので、我々から受け継いで守っていく姿勢が必要ではないか。地元の祭礼団のように自然に受け継がれていっている部分もある。

意識調査を見ると、通院や買い物が不便である割合も高いが、かかりつけ医にはしっかりと通えている。骨折や大きな病気で違う病院に行く必要が生じたときに不便と感じているのではないか。病院独自の移送サービスや介護保険ではない移送サービスがあることを知らないのでは感覚的に不便と答えているのではないか。情報発信をしっかりとできれば意識が変わってくると思う。

[委員]

それぞれの市ごとに情報発信されているものはあるか。

[委員]

求めている物に合致するかどうかはわからないが分野ごとでの発信はしている。話は戻るが、福祉施策は3市の足並みを揃えられることが最善であると思う。人口が減少すると学ぶ場所の運営や維持ができなくなり町が疲弊して悪循環となるので人口施策は基軸になるのかなと思う。

[委員]

子育てでは1つの冊子にしたり、移住も3市共通で施策を並べてやっていたりと分野ごとにはあると思うが、すべてが1冊に取りまとまっているかというところまではできていない。

[委員]

子育てハンドブックをつくるなど、一昔前と比べると意識は高くなっていると思う。そこからさらに電子化や情報発信力をあげるなどはこれからの課題と思っている。

[委員]

この検討委員会のめざすところは30年後の淡路島がどういう形になっていたらいいかということ策定することだと思う。そのときに各分野での理想像をあげていくことになるのか。

キャッチコピーのようなスローガンをつくるのがゴールなのか資料として残すのがゴールなのかイメージがわからない状態で進んでいる気がする。どういう指針で進むのかアウトプットイメージを議論する必要があるのでは。

[委員]

これまでは様々な意見を出すためのフリートークという位置づけで進めているが、次回以降はご指摘の議論も進めていければと思う。

決して絵に描いた餅のスローガンだけを書くのではなくて、将来こうなればいいという具体的なイメージをビジョンで示せばいい。

[事務局]

計画ではないので、淡路島に住んでいる人がこうありたいと共有できるようなものにしたい。そこにスローガンやキャッチコピーがあるとみんなが共有しやすいのかなと思う。

構成などもこの委員会で考えていただくことになる。